『儀禮』喪服篇の成篇過程について

黒﨑恵輔

通行本『儀禮』十七篇の一つである喪服篇は、喪に服する際の服飾の規定を主として記すものであり、そのテキストは経文とともに「傳」と「記」の文章が併せ記されている。『儀禮』十七篇のなかで唯一「經」・「傳」・「記」を混在した喪服篇は、他篇が儀礼の式次第に従ってその手順と規定を書き記したものであるのに対し、喪服の規定を体系的に整えようと“作られた”といえる点で、十七篇中においても特異である。

現行のテキスト中において、「傳に曰く」の語は、「傳」・「記」の文章中にも見受けられる。通説的理解の一つでは、「傳」の作成者がさらに旧い「傳」を引いたために残った、異なる時制において編集されたからであると考えられている。しかしながら、もし初めから経書（「經」）とその注釈的文書（「傳」、「記」）とを明確に分別した上で編纂されているのであれば、経・傳・記それぞれの文が混同するであろうか。おそらくはあり得ないはずである。混同しているということは、それがいまだ經學の体系性が明瞭になっていなかった時点で編纂されたものと仮定することが出来る。

本発表では、『儀禮』喪服篇のテキストを、その成立時期に近い他文献（『武威漢簡』の喪服篇甲・乙・丙本、及び石渠閣論議における礼議奏残片）などと比較・検討する。ここから、現行テキストにおいて「經」「傳」「記」が混在することとなったその過程と背景について追求してゆく。

※誤字（衍字）訂正について

発表者より誤字（衍字）訂正の申告を受け、修正いたしました。

発表要旨最下行から数えて三行目：×「こここから」　→　○「ここから」

関係者の皆さまにご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げます。

（2019/4/3　　日本儒教学会　記）